



2025年6月20日（金）、創立150周年事業を飾る記念フォーラム「樹心に問う」が開催されました。

梅雨時とは思えない真夏の陽気に包まれた快晴のなか、真宗大谷派や学校の関係者、教職員や保護者の方々が集い、会場となった講堂・樹心閣がほぼ満席になるほどの盛況ぶりでした。

ここでは基調講演とパネルディスカッションの内容を全てお届けします。

学校長あいさつ(開会)



本日はようこそお越しくださいました。ここに山極壽一先生、ウスビ・サコ先生、真城義麿先生をお招きし、本校創立150周年記念フォーラムが開催できますことを、心より嬉しく感じております。

校歌にある「よき世の人」とは一体何なのか。それを表す教え、示す言葉が今回の周年事業のテーマでもあります「樹心(じゅしん)」です。「心を樹(た)てる」という意味です。

かつて京都新聞に、『親鸞』という小説を連載されていた作家の五木寛之先生が、社会というものを1台の車に例えてこのようなことをおっしゃっています。

「世の中にとって宗教というものは、具体的に役に立つものではあるまい、と思っています。宗教とは、世の中のプラスになるものではなく、一見マイナスの働きをするものではないのか。経済というものは社会のエンジンでありアクセルである。政治はハンドルだと思うのです。社会の進むべき方向を決めていくのが政治です。

では宗教はどんな力か。僕は、宗教は一種のブレーキだと思ってきました。ブレーキはスピードを止めるものです。ですから、社会において宗教は、マイナスの働きをするのです。

しかし、アクセルを踏みっぱなしの経済は、ブレーキのついていない車は、加速を続けていればどこかでひっくり返るに決まっています。僕らはみんなブレーキなしの車には怖くて乗れません。もし人間の欲望というものをほったらかしにしておいたら…。

その限りない欲望に、ここまでではまずいと思わせるものは、宗教の力だと思います。僕らは宗教というブレーキを持っていないからではない。

今のこの社会を個人に置き換えた時、やはり同じことが言えるのではないかと思います。

自分の好き嫌いや価値観を確かなハンドルのようにして、方向を決めていくあり方。今流行りの承認欲求という名の欲望をエンジンにして、アクセルをふかして周りの人を顧みることなく、前へ前へと進もうとしていくあり方。人を思いやるという、すべての宗教に共通するブレーキが壊れたあり方。自分の思い通りになることが幸せだと、それを願い生きている結果です。

それは「縁起」という仏教の教え、道理に反した生き方であるがために、心を痛め、息苦しさを感ずる人で満ちている、それが現代の社会ではないかと思うわけです。

お釈迦様も、心の問題については多くの言葉を残されています。その一つに「心は動揺し、ざわめき、護り難く、制し難い。英知ある人はこれを直[なお]くする」という言葉があります。仏教で言う「英知ある人」とは、教えに、道理に出あった人のことです。「直くする」というのは、曲がっているものをまっすぐにする、凸凹を平らにする、そういうことだと思います。

今日は現代社会において、まさに英知とも言うべき3人の先生方をお招きすることが叶いました。ただ、私たちの問題としてお話を聞いて、自分の心を平らにすると丸くなる、これは難しいことです。

私が願うのは、自分の心は真っ直ぐだと思っていたけどひん曲がっていたな、とうとうとうだと思っていたけどざらついていたのだな、そういった気付きをいただけたとしたら、それはそれは素敵な時間になると思う次第です。皆さまとともに、素敵な時間を過ごしたいと思います。

皆さま、ようこそ大谷へおいでくださいました。ありがとうございます。

山極壽一氏による講演 『思春期の学びとは何か』



《講師略歴》

山極 壽一氏（やまぎわ じゅいち）

総合地球環境学研究所所長

京都大学前総長 同大学名誉教授

東京都生まれ。霊長類学者、ゴリラ研究の第一人者。京都大学理学部卒、同大学院で博士号取得。京都大学霊長類研究所などを経て同大学教授、2014年10月～2020年9月まで京都大学総長を務める。2021年より現職。

《講演内容》

弱みを強みに変えながら生き抜いてきた私たち人間が、いま直面している社会的な課題に対してどう向き合い、“人間らしさ”を取り戻していけばいいのでしょうか。

ゴリラの研究をしてこられた経験から人間を外から見つめ直し、ゴリラとのエピソードやデータを交え、分かりやすく講演してくださいました。

二足歩行という弱みから始まった、人類の発展

約700万年前、私たちの祖先はチンパンジーと分かれ、二足歩行を始めました。これは速度や木登り能力を失う弱みもありましたが、効率の良い長距離移動や両手での物の運搬、仲間との安全な食事を可能にしました。姿勢の変化により歌や踊ることができるようになり、共感し合う力も育ちました。

こうして、人間は見えない仲間のために食べ物を採って持ち帰り、分け合う文化を築き、そこに生まれた「想像力」と「精神力」が強みとなって大きく発展したのです。食物は栄養だけでなく、人間関係を結ぶ手段にもなりました。

ゴリラと人間の赤ちゃんの違い

ゴリラは小さく生まれ、3～4年間母乳で育てられます。一方、人間は大きく弱く生まれ、早く離乳します。これは、サバンナの危険な環境では子どもが捕食されるリスクが高く、少しでも多く子どもを産むために、早く妊娠できる体づくりを意図的にゴリラが行ってきたからです。

また、人間はゴリラよりも多くの脂肪を蓄えて生まれてくるのですが、それは脳の発達を支えるためです。直立二足歩行と骨盤の関係で頭の大きな赤ちゃんは産めないため、まずは小さな頭で生まれたあと、急速に脳を発達させる必要がありました。

そのエネルギー源が、体脂肪です。この脳が発達して大人のサイズになるのが、ゴリラは4歳ですが、人間は12～16歳と時間がかかります。その分、エネルギーは長い間脳の成長へ優先的に使われ、体の成長は後回しに。

この結果、脳の発達が一段落してから身体が一気に成長する「思春期スパート」が起こります。今の中高生がこの時期にあたります。

リスクが潜む思春期

「思春期スパート」の時期は、身体と心が急成長する大事な時期である一方、リスクも伴います。身体の成長と心の発達のバランスが崩れやすく、事故や精神的トラブルが増えるためです。

統計では、生後すぐの死亡率が高く、10歳前後で一度下がるものの、思春期になると再び上がる傾向が見られました。これは国や時代を超えて共通しており、人間の生物学的な特徴と考えられます。

そのため、離乳期までと「思春期スパート」の特に不安定な時期は、みんなで子どもを支えなければなりません。

学びの本質は「猿まね」から

人間は生後すぐに模倣行動を始めます。これは「猿まね」とよく言われますが、実際には、サルはサルのまねをしません。人間特有のこの能力は、学習の根幹をなす重要な行動です。

顔の表情をまねしたり、他者の視線の先を見るようになったり、指差しで周囲に注目を促したりと、模倣を通じて共感性や学習能力が育まれます。この模倣を通じた成長は、他者との関わりによって強化されます。孤立しては育ちません。

また、脳の成長は12～16歳ごろでピークを迎えますが、その後、25歳くらいまでは「メンタライジング」（他者の心を理解し、文脈に応じた行動をとる力）を発達させます。

この長い学習期間は、社会に適応し活躍する力を育むカギとなるもの。そのため、学びの重要な時期は「離乳期」「思春期スパートの時期」「青年期（社会や大学で自分の立ち位置を理解し能力に目覚める時期）」の3つがあると言えます。

脳が大きくなり言葉が生まれた

人間の脳はゴリラの3倍大きいのですが、なぜ人間の脳がこれほど大きくなったのでしょうか。一般には、言葉によって記憶が増え、その収納のために脳が大きくなったと考えられがちです。しかし脳の拡大が始まったのは200万年前、言語が使われるようになったのは7～10万年前です。

つまり、言葉が脳を大きくしたのではなく、大きな脳が言葉を生み出したのです。

イギリスの生物学者であるロビン・ダンバーは「脳の新皮質の大きさと集団の大きさに相関がある」という仮説を提唱しました。調査の結果、脳が大きいほど、より大きな集団で暮らしている傾向があったのです。

複雑な集団の中で多くの仲間と関係を築き、維持するために、人間は大きな脳を必要としたのでした。

自然にできた集団サイズ

この仮説をもとに、化石人類の脳容量から当時の集団規模を推定すると、200万年前の人類は脳の拡大とともに集団も拡大し、現代人の脳容量、1400～1600ccに匹敵するころには、約150人規模の集団で生活していたと考えられます。

実際、現代でも狩猟採集生活を営む人々の多くは、平均して150人程度の共同体で暮らしています。興味深いのは現代においても、この進化の過程で作られてきた集団のサイズとコミュニケーションのタイプを維持していることです。

例えばゴリラの集団サイズや家族・親族と同じ10～15人の「共鳴集団」は、スポーツチームのように、言葉を使わず動きや雰囲気で見通せる関係。人間の脳が大きくなり始めた200万年前からある30～50人の集団は、学校のクラスや会社の課のように、顔と性格が一致し自然と統率がとれる関係。

そして現代の脳のサイズに匹敵する150人の集団は「社会関係資本（ソーシャルキャピタル）」と呼ばれ、困ったときに疑いなく相談できる信頼の輪の上限です。言葉だけでなく、共に泣いたり笑ったり、授業やスポーツ、ボランティアなど、身体を通じた共有体験によってのみ関係性が育まれていきます。

言葉はこうした信頼のある内側の関係をつなぐためではなく、むしろ外部との交渉や契約、発展のために、意味のあるものとして登場したのではと思われます。

言葉以前の「向かい合う」力

ゴリラとの交流からわかるのは、「向かい合う」ことの力です。ゴリラは相手が自分の方を見てくれないと挨拶できません。人間も同じで、言葉があるにも関わらず、目と目を合わせ、相手の表情を読む「対面」の重要性を無意識に大切にしています。

人間の目には「白目」があり、1メートルほどの距離で手の目の微細な動きをキャッチし、気持ちを読み取ることができるように進化しました。人間は向かい合って目を見ることで、これらを瞬時に察知できる能力を発揮し、共感力を高めるのです。

しかし今、SNSやスマートフォンで常に「つながり」を持つ一方で、こうした実際の対面によるコミュニケーションが失われつつあります。若者たちは知識をインターネットで得られるため、学校に行く目的も変わってきました。

これからの教育は、単なる知識を伝えるだけのものではなく、それ以前の知恵の共有と、未知の世界を考えや体験・体感から教え、共感力を使った学びの場を演出する必要性が出てきたのではないのでしょうか。

共感の社会と社交の文化

人類は本来、弱みを支え合うことで社会を築いてきました。ところが現代は、個人の強みを拡大し、競争に勝つことが重視される時代へと変化しています。その結果、私たちはAIや情報に頼りすぎ、身体性や感情をベースにした判断力や直感力を失いつつあります。AIは情報だけを組み合わせるため、身体や意識に合わない論理や倫理ができてしまう可能性があります。

人間は高い適応力で、簡単に見えるその答えに依存し始めつつあるので、私は危機感を覚えています。また、制度やシステムへの依存が進み、人間関係の縁（地縁、血縁、社縁）が希薄になりました。

その代わりに一時的なイベントや体験を通してつながりを求めています。それはあくまで一過性のものであり、本質的には人を救いません。持続的な縁がなければ、人は生きていけません。そのため今は新たな社交による文化を再構築する必要に迫られているときだと感じます。

社交とは何か？

劇作家・山崎正和氏によると、社交とは「人間のあらゆる欲望を楽天的に充足しつつ、しかしその充足の方法の中に仕掛け(礼儀作法)を設け、それによって満足を暴走から守ろうという試み」であり、表情や発言、感情を周囲と調和させ、場のリズムを盛り上げる必要があり、全体の行動は音楽のように緊張感と一体感をもって進められるとされています。

つまり共同体は、音楽的コミュニケーションによってつくられており、文化は社交によってつくられると言えるのではないのでしょうか。

人間の社会は、「移動する自由」「集まる自由」「対話する自由」の3つを謳歌しなければ、幸福になれません。

現代は「第二のノマド(遊動)」時代とも言えます。情報と移動の自由が広がり、所有よりもシェアやコモンズ(共有資源)を基本とした新たな価値観へと変化しつつあります。

定住と所有を前提とした社会がもたらした争いや分断を変えなければいけません。ものが、人と人を繋ぐ時代を、もう一度つくらなければいけないだろうと思っています。

「Think Globally, Act Locally(地球規模で考え、地域で行動する)」とよく言われますが、私はそれを逆転して「Think Locally, Act Globally」と提唱しています。まずは自分たちの足元を見つめ、自分たちの生活というものを、根本から価値を見直すことが重要なのです。

これからの時代を生き抜くために

コロナ後の社会に必要なことは様々ありますが、やはり家族は開かれたいけないですし、通信情報機器も賢く利用しながら、私たちが持って生まれた五感を十二分に使い、自由を謳歌する、新しい生活のあり方を築いていくときだと思います。

争いばかりの人間たちも、共感力を基にこの社会を作ってきました。多様な個性が会うことによって新しい気付きを得られる社会へ、今一度根本から見直し、その共感力を再び発揮すべきではないのでしょうか。

ウスビ・サコ氏による講演 『宗教と共に生きる社会をつくる「問い」が導く対話と理解』



ウスビ・サコ氏 (Dr. Oussouby SACKO)

東京都公立大学法人 理事

京都精華大学元学長 同大学名誉教授

マリ共和国生まれ。北京語言大学、南京東南大学を経て来日、99 年京都大学大学院工学研究科建築学専攻博士課程修了。博士(工学)。専門は空間人類学。2018年4月～2022年3月まで京都精華大学学長を務め、同大学全学研究機構長 / 人間環境デザインプログラム教授などを経て、現職。

《講演内容》

宗教という視点で社会を見るのと同時に、「問い」というものがどのような力を持っているのか。ご出身のマリ共和国での暮らしや日本での経験を通じて、「問い」が持つ力や、人と人との対話、そして多様性へのまなざしについて、ユーモアを交えながらお話してくださいました。

マリの共同体と教育の原点

マリの都市部で私が育った家には、いつも20～30人が出入りし、一緒に暮らしていました。家族だけでなく、父の郷里の人や親戚、知人、その知り合いまで、見知らぬ人も自然に「そこにいる」のが当たり前。その人たちはいつの間にか子どもたちの教育係になり、教えたり叱ったりもするようになりました。

ただ、大人たちの言うことには一貫性がなく、それぞれ違う。しかしそこに親は、一切口出しをしません。いろいろな大人が様々なモデルを示すことで選択肢が増えるので、子どもたちは自分の中で判断力や選択力を自然と養っていきます。中庭はそんな生活の場でした。朝になると誰かが食事に来たり、遊びに来たり。日常の空間が、そのまま学びや対話の場になっていたのです。

この暮らし方は、現代社会で薄れつつある血縁や地縁のつながりを見直すヒントにもなりました。私はこれを「空間人類学」の視点で研究してきました。マリの中庭は、台所、寝室、ダイニングと、使う人や目的によって姿を変える多機能空間です。

600平米に72人が暮らす中で、日々交渉によって使い方が決まり、空間が作られていく。誰かが料理をすればそこが台所になり、布を広げれば仕事場になる。中庭を使うことを通じて、お互い自然にコミュニケーションがとれていたのです。

文字だけに頼らない対話の文化

マリの歴史を辿ると、ガーナ王国、マリ帝国、ソンガイ帝国と続き、フランスの植民地を経て多民族が共存してきました。その中で大切にされてきたのが対話です。文字を持たない人々が話し合いによって国家をつくり、憲法までもが口承によって生まれました。現在ユネスコ世界遺産にも登録されているこの憲法には、多様な人々がどう共に生きるかが記されています。

このようなマリの社会で調整役だったのが、「グリオ」と呼ばれる語り部たち。彼らは世襲制で、物語や歴史を伝えるだけでなく、争いがあれば仲裁し、楽器を奏でて音楽や話術で場を和ませながら対話を導く存在でした。

多言語が混在しているマリでは、それぞれの言語を話せなければ意思疎通ができません。これもマリの共同体の特徴です。他にも、学校と家庭の役割が明確に分かれています。学校は学問を教える場所で、家庭や地域は生活に必要な知恵や倫理、役割分担を学ぶ場所。

子どもたちは学校から帰ると宿題ではなく家事の手伝いをして、洗濯や料理、近所の人との挨拶などから自然と社会的なルールや責任を学びます。それが「地域の一員として育てる」教育なのです。食事も重要な時間で、食卓での会話を聞きながら交流し、子どもたちは多くを学びます。

さらに挨拶も重要です。マリの挨拶は非常に長く、最低3分はかかります。「よく眠れましたか？」「家族は元気ですか？」といった丁寧な言葉のやりとりで、相手への関心と敬意を伝えるのです。

日常の随所に問いと対話、意思を伝えることが自然と根付いている。だからこそマリでは文字を使わずとも豊かなコミュニケーションが可能なのです。

異文化と出会いから自分を見直す

日本に留学して、文化の違いに戸惑うことが多くありました。たとえば、フレーム化。「A型っぽい」「○○出身ならこうだね」など無意識のうちに分類し、その枠内で理解しようとする。「相手を枠にはめて見る」傾向を強く感じました。

また納得いかなかったのが「割り勘」です。お酒を飲まない私が、お酒を飲む人と同じように料金を払うことに違和感を覚えました(笑)。

なかでも私が日本で特に苦しんだのは、「空気を読む」文化です。意見を言わないことが美德とされ、批判を避け、人に合わせることでトラブルを回避しようとする場面によく出会いました。

しかし、意見を出し合い、問いを立て、対話することでこそ、絆も学びも深まるように思います。これまでとは違う日本のなかで、私は、同化はせずとも、しっかりと自分の居場所を開拓していきました。

他者と出会うことは、自分自身を見直すきっかけになります。他者を鏡として見ることで、自分の存在や、何を大切にしているのかに気づくことができるのです。

日本人の宗教観と無意識の寛容性

日本では「無宗教」と答える人が多いですが、「いただきます」「お邪魔します」などの言葉には、目に見えない存在や他者への敬意が込められていて、日常の中に宗教的な精神が根付いていると感じます。形式にとらわれず、共生や感謝、礼儀を大切にする姿勢と精神は宗教的な感性で、多様な宗教への寛容さにもつながっています。

神社やお寺で会議やイベントが行われるのもその一例です。宗教空間を柔軟に利用し、他者の価値観を受け入れるこうした「無意識の寛容性」は、宗教的対立の絶えない世界に対して、日本が発信できる大切な価値だと思います。

問いの先にある好奇心と学び

私は日本で中学校のサッカー部の指導をし、小学校や幼稚園もよく訪れました。その中で、子どもにとって意味ある学びは、良い正解を教えるのではなく、自分で気づくことだと感じました。

問いかけを通じて対話を続けると、子どもが自分で答えにたどり着く瞬間があります。この問いと答えの間に無数の好奇心があるにも関わらず、今の教育は、すぐに答えを提示し、テンプレート化されているのではないのでしょうか。

先生方の多忙もあり、時間との戦いの中で、子どもを個としてではなくパッケージで見えてしまっていると、見逃すことがとても多く、様々な問題につながっているように思います。

たとえばいじめでは、「いやだ」と自分の意思表示や反論をする訓練がされていないことから起きているものが多く見受けられます。教育は本来、自分を確立しながら他者を尊重する力を育てるもの。日本では個の尊重よりも「合わせる」ことが重視されすぎて、対話の準備ができていない印象を受けます。

ノーベル賞受賞者の真鍋淑郎さんも、日本の「同調圧力」が理由でアメリカに渡ったと語っています。この「周囲に合わせなければならない」という風潮が、日本の教育が抱えている課題のひとつのように思います。

子どもの目線から、子どもの想いを実現する社会を

中学生だった息子とその友人たちで乗り換え旅に出たことがあったのですが、帰宅後にその息子の友人から、今後の自分のあり方について私へ質問のメールが来て、2時間ほど問答をしました。彼が私に相談したのは、旅の間に対等に接したことで安心感を得たからだと思います。

大人が子どもの目線に立ち、信頼関係を築くことは重要です。短い時間でも子どもと真剣に向き合い、命令ではなく対話を重ねることで、子どもは大きく変わります。実際に彼は、その後海外留学をして一流大学に進学しました。

このような経験を通じて私は今、「子どもの想いを尊重し、実現できる社会づくり」を重要視しています。2042年ごろには、子ども自身の関心を軸にした「対話重視の『テラコヤ型』学習」が主流になり、先生はアドバイス役になるのではと考えています。

自分を理解し他者を認める

日本人の、特に中高生あたりの子どもたちは、アイデンティティを失いつつあると感じています。社会学者のリチャード・セネットは「自信のなさの裏がえしから、排他的になりかねない」と言っています。自信を持つために自文化をしっかりと見定めること、そのために失敗を恐れず、自分を知ることがまず重要だと考えます。

もうひとつ重要なのは、「ダイアログコミュニケーション」です。特に、対話を通じてお互いの価値観を認め合うことは欠かせません。哲学者ソクラテスが「ダイアログ」について語ったように、まず「自分は何者か」「相手は何者か」を理解することが対話の出発点です。自分をよく理解し、受け入れられる人は、他人も受け入れることができるからです。

また、自分の考えや言葉をしっかり持つことも大切です。近年、無宗教の人が増えていますが、2050年には多くの人が信仰を持たなくなるとも言われています。その要因は、インターネットやAIなどに頼りすぎて、自分の内面ではなく外のものに答えを求めるようになり、自分自身を見失ってしまっているからです。これからは他者をどう受け入れるか、どう向き合うかがますます重要になってくると思います。

違いを受け止めて、つながりを築く力

人は一人では生きていけません。だからこそ他者や、自分と違う考えを持つ人を受け入れる姿勢が大切です。たとえ理解できなくても、「そういう考えもある」と受け止めるだけでも十分。

多様性や包摂性は、そうした姿勢から生まれます。マリの社会では、通過儀礼を通じて若者たちに知恵や価値観を伝える仕組みがあります。これは社会性や共同性を育てる大切な場となり、人とつながるプラットフォームのような役割を果たします。「適度な迷惑」をかけ合いながらお互いを支え合うことから、強い絆が生み出されるのです。

「問い」を育てる力と、共に生きる知恵

一方で、日本では「疑問を持つこと」が遠慮されがちな空気があります。暗黙の了解や文脈に頼るコミュニケーションが多く、率直な問いかけがしにくい環境があるのです。

でも本来、コミュニケーションとは「問いを立てること」から始まるもの。私は若い人たちに、「なんでやねん！」と突っ込みを入れるような好奇心を大切にしてほしいと伝えています。答えがない状況でも、自分で問いを立てる力がきちんと身についていれば、どのような状況の中でも生き抜いていけると思っています。

日本の教育では、そうした問いを立てる力、自分を見つめ直す時間が不足しているように感じます。変化を恐れず、他者と共に歩む力こそが、これからの時代に必要なのではないのでしょうか。アフリカのことわざにあるように、「早く行きたければ一人で行け。遠くまで行きたければみんなで行け」。共に生きる力の重要さを、今こそ見直すときです。

パネルディスカッション『樹心に問う』



《パネリスト》

山極 壽一氏（やまぎわ じゅいち）

ウスビ・サコ氏（Dr. Oussouby SACKO）

《モデレーター》

真城 義麿氏（ましろ よしまろ）

愛媛県今治市善照寺住職、大谷中学・高等学校 元校長

大谷大学大学院文学研究科修士課程修了後、大谷中学・高等学校の教諭を経て、1997年から2011年3月まで同校校長を務める。真宗大谷学園前専務理事。

お二人の講演をふまえ、自然と人間の関係性や信仰、教育における気づきや学びについて、様々な角度とそれぞれの視点から、幅広く議論が交わされました。

樹木に習う、自然と人間の関係性

真城氏(以下 真): 今回は「樹心に問う」というテーマです。この学校の建学の精神にもある「樹心」の「樹」は、「樹立する」「たてる」という意味で、「樹木」の「樹」でもあります。樹木や森林を含めた自然と私たち人間について、ご意見をお聞かせください。

山極氏(以下 山): 先程の講演でサコさんが「日本の子どもたちは自分を見つめる時間をあまり持たずに逃げている」と話されていましたが。樹木は逃げないんですよ。動物は逃げる。植物は虫を使って受粉したり、動物に種を食べさせて糞に紛れて運ばせたりしながら、風が吹いても雨が降っても、その場ですべてを受けとめているんです。しかも地下に根を張って、他の植物と菌で会話をするかのように栄養物を交換している。

近年は様々な発見がありまして、植物の方が動物よりも上だとの考察も進み、「植物の哲学」を提唱している学者もいます。植物には植物ならではの哲学や深い営みがあると。そのため、生物界全体から再考する必要があるのではという視点が、今世界的に広がってきています。

真: 近年は、植物同士のコミュニケーションや植物の戦略ということが、随分話されるようになってきましたね。サコさんは、自然との関わりはいかがでしょう？

サコ氏(以下 サ): マリは森林がないステップ気候なので、木は非常に貴重な存在です。だからこそ、大きな木が象徴的・精神的な意味を持つことがありますし、アニミズムの文化が根強いので、特定の木が信仰の対象になることもあります。中庭には必ず1、2本の大きな木が植えられ、その木陰で生活し、語り合う。マリでは木の「根」も重要で薬や伝承にも深く関わっているので、「一本の大木が倒れると、一つの村が倒れる」と言われるほどなんです。樹木はとても特別な立場にありますね。

真: 木陰は学びや交流の原点かもしれませんね。お釈迦様も菩提樹の下で悟りを開かれましたし、日本でも神木として祀られる木があります。木と学びには深い関係があると感じます。

「問い」や発見を引き出すプロセス

真: お二人は研究者であると同時に教育者としてもご活躍ですが、今の教育についてどのように感じておられますか？

山: 講演でサコさんがおっしゃっていたように、大学では学生が「問いを立てる」ことがとても重要だと思います。それを仲間と一緒に考えるプロセスが大切なんです。世界の大学の学長たちも、口を酸っぱくして「Curiosity base」と言っています。つまり好奇心をもっと前面に出して、自分なりの「問いを立てる」こと。しかもそれを一人で持っていては駄目だということなんですね。私は学生とアフリカの熱帯雨林の森へよく行ったのですが「常に問いを持ちながら歩く」よう伝えていました。川や空や山や、何でもいいから自分の問いを発してみると、自然は何かしら答えてくれることがある。言葉が通じない相手にも問いを発することで、自分の感性が開かれる。問いがなければ学びは始まりませんし、好奇心は教育のベースです。人間は、出会って気づくことができる生き物で、創造性につながります。都市の中ではそういった変化に気づきにくい。人間同士の出会いが、変化を生みます。そこで問いを立て、気づくことが、学びの根本だと思います。

サ: 私は自然ではなく、街の中へ連れていきました。「本を捨てて街へ出よう」と。知識は本にありますが、人間が持っている感覚の方が優れていて、観察から見える真実は、はるかに深い。だから学生を連れ出してフィールドワークへ行き、自分のコンフォートゾーンから出して、「当たり前が通じない状況」に出会わせようと思いました。そのときが、一番自分と向き合える瞬間ではないかと思います。また、物をじっくり観察して、スケッチやデッサンをさせました。物とじっくり対話して、特徴を見つけ出す力を養うためです。先入観やネットの情報で、見てもいないのに知っている気になることが多い今だからこそ、実物をじっくり見て学ぶ力が大切だと感じています。

真: 日本では、「大人が計画した教育」に子どもを当てはめようとしすぎているのかもしれませんが。実はそれはとても狭いものののに押しつけて、子どもには「夢を持て」と広い要求をする。子どもたちはその枠に入れないと自信を失い、自分を否定してしまうこともあると、今とても感じています。

サ: 夢を見ろと言われても、大人が作った世界に夢が見えないんですよ。大人が自信をもって未来を描けないから、子どもも夢を持てない。だからこそ子どもを信じて、先に行かせるべきなんです。私は学生の可能性を本気で信じていたので、よく無茶もしました(笑)。ある時、ゼミ生が「焼肉が食べたい」と言ったので、「それなら本場に行こう」と、ソウルまで連れて行ったこともあります。もちろん怒られましたが(笑)。しかし彼らは完璧に計画し、やりきった。学生の力は大人の想像以上の素晴らしいものがあると、改めて気づきました。それをきっかけに、大学も「ショートプログラム」という正式な制度を作ってくれたんです。つまり、大人が勝手に「学生はまだ無理」と思い込んでいるだけで、実際には驚くような力を持っている。それをもっと信じるべきだと思います。



答えのない問いに向き合う学び方

真: 今の子どもたちが夢中になっているゲームや遊びを見ていると、それらは結局、大人が設計した枠組みの中で遊ばされているとも言えるんですね。本来であれば、子ども自身が自由にゲームや遊びを生み出していく、その創造性を応援できるような環境が必要ではないかと思います。常識の枠にとらわれず、無限の可能性や、存在そのものが尊いという視点を忘れ、条件付き承認で萎縮させる方向へ進んでいるような気がします。

山: 高校教育と大学教育が断絶しているんですね。教員免許が必要ない我々大学教員のプライドは何かというと、「アホになれる」ことなんです。つまり世間の常識にとらわれず、世界を広げて新しいことを自由に考えられる能力があることです。最先端の知識を取りに行って、広く、新しいことを考察し、それを学生たちに伝える。そこで学生があまりにも常識的なことばかり言っていたら、逆に「もっとアホになれ」と言います。そうでなければ、彼らの凝り固まってしまった常識が壊せないんですよ。大学は「答えのない問い」に向き合う場所。高校までは「正解」を探す訓練ですが、社会に出ると必要なのは、曖昧さに耐えながら考える力、いわゆる「ネガティブ・ケイパビリティ」です。本当は高校までにそうした能力を鍛えてほしいのですが、大学受験があるため現実には難しい。だからこそ、その接続をどこかで補えるような学びが必要だと強く思っています。

サ:私もそれを痛感したので、「哲学」と「自由論」を必修科目にしました。哲学は学生たちに「考えるとは何か」を教える機会になる。自由論は、「自分について考える」ことができる。1年生に「自由とは何か?」とアンケートを取ると、多くの学生が「欲しいものが手に入ること」だと考えていることがわかりました。しかし本当の自由とは、与えられるものではなく、自分の内側から掴み取るもの。こういう考えを崩すためにも、山極先生をはじめ、様々なゲスト講師をお招きして、お話からヒントを得て考える機会を設けています。哲学の授業では、先生方は哲学史を教えがちですが、それだけでは学生は自分で問いを立てられません。特に日本の教育では、「自分で問いを立てる経験」が非常に乏しい。それが、大学に入って突然「自分で考えろ」と言われて戸惑う理由なので、やはり高校と大学は一緒になって、その接続を作る必要があると私も思います。

真:本校では、「宗教」の授業を設けています。問いを立て、仲間と語り合い、共に考え続ける。それを3年間、あるいは6年間、繰り返していく。正解のないことに向き合う経験を積み重ねる場として、とても意義深いと感じています。

山:問いを持つきっかけとして、学生たちには「自分と考えの異なる人と話をする」よう伝えています。最初は皆、抵抗を感じます。「意見が合わない人となんて無理だ」と。しかし時間が経つと、意外と打ち解けるんですよ。むしろ、その違いが刺激になる。問いや議論も生まれて、どんどん発見することもできるので、積極的にチャレンジしてくださいと言っています。

サ:以前、山極先生が「差別は人間が作ったフィクションだ」とおっしゃっていたことがありました。確かに私たちはそのフィクションや想像でいろんなことを決めています。学校でも差異をポジティブに受け止める訓練を、教育ではあまりしてきていません。違いがあるのは良くないこと、だから合わせないと、差を埋めないと、となる。でも、合わせ過ぎてしんどくなってしまう学生も多いのが現実です。ゼミ旅行を計画したとき、部屋割りのあとでこっそり「やっぱりあの子と一緒に部屋は嫌です」と戻ってくる学生もいます。その場では空気を読んで合わせたけど、本音では無理だったと。その背景には、「違いを示せば排除されるかもしれない」という恐れがあるように思います。



大人の想像を超える、子どもの可能性

真: そういう違いも含めて、「転けても大丈夫」と支えてもらえる、大きな世界への信頼感が大切ですね。たとえば、海で溺れかけたとき、最初はもがいて水と戦います。でも救命具があれば、それをつかんで、今度は海に身を委ねる。かつて敵だった海が、自分を支えてくれる存在に変わる。そのような安心できる土壌があれば、子どもたちももっと違いを楽しんだり、自分の限界を面白がったりできる、学びや育ちになるように感じます。

サ: 私たち教育者は、実は常に子どもたちから試されているとも感じます。課題を出さない学生も、単なる怠惰というより、大人がどう反応するかを見ていることがあるんです。声をかけると、意外と本音を話してくれたり、前に進めたりする。でも、そこには私たちが対話の姿勢を持ち続けていなければいけません。子ども達を支える教育者が、これをどう乗り越えていけばいいのかも、考えを新しくしないといけないときがきているように思います。

山:先ほど波の話が出ていましたが、私も川で興味深い経験をしたことがあります。以前、あるプロジェクトで小学生と屋久島へ行き、川遊びをしたんです。とてもきれいな川でしたが、ゴツゴツした岩のある急流だったので、後ろで見ていた親たちはとても不安がりました。

それなら「一緒に泳いでみますか？」と促し、親も泳いでみたら、子ども達は無傷で流れついたのにも関わらず、大人達は全員怪我をしました。いかに子どもたちの心が素直かということなんですよ。それくらい、子どもたちは流れに素直に乗れるし、新しいことに挑む柔軟性があるんです。

その信頼感と新しい自分を湧き立たせる気概を子ども達に持たせるよう、大人がサポートする必要がある。大人たちが知っていることを、いかに子どもたちの自尊心を尊重しながら教えるか。子ども達はその大人たちとの信頼関係を糧に、チャレンジを乗り越えるわけですね。それがまさに教育なのではないでしょうか。

ただマニュアルに沿って教えることなく、私たち大人自身も、絶えず変化し続ける社会や自然と向き合いながら、子どもたちと共に学び、チャレンジしていかなければなりません。子どもたちは、大人の信頼と対話の中でこそ、自分の新しい可能性を開いていける。その環境を、私たちがどれだけ本気で用意できるか。それが、今の教育で問われていることなのではないでしょうか。

真:本当にそうですね。未来に適応するために子どもを育てるという考え方は、私たち大人の想像の枠内に留まる狭い未来になってしまう。むしろ、何が起こるか分からない未来を、恐れずに楽しむ力、自ら切り拓く力を育むこと。それこそが、これからの教育の本質になるように思います。

時間が限られているのが残念でしょうがないのですが、ここで閉じさせていただきたいと思います。今日は本当にありがとうございました。

■学校長あいさつ(閉会)

先生方、本当にありがとうございました。

山極先生には、「自分と違う考えを持っている人と過ごす時間を大切に」すること、そして「問いを立てる」こと、これが大事なのだと改めて教えられました。サコ先生には、「すぐに答えを与えない」ことが大事なんだと。「問いと答えの間に無数の好奇心がある」と。その言葉が本当に印象に残っています。

私たちのご本山、東本願寺の研修道場というところの壁に貼ってある言葉が「問いは世界を開く 答えは世界を閉ざす」。奇しくも、その言葉の持つ大切さというのを、今日改めて教えられた、そんな思いでいっぱいです。

先生方、また今日足を運んでくださった皆様方、教職員、事務職員の皆様、この場を整えていただいた皆様に感謝を申し上げて、閉会の言葉といたします。ありがとうございました。



今回のフォーラムを通して明らかとなったのは、「自ら問いを立てる」ということ、そして「自らを問う」ということの大切さではないでしょうか。

3名の先生方からいただいた視座を通して、「樹心」とは、今を生きる私たちに向けられた宗祖親鸞聖人あるいは初代校長清沢満之からの問いかけではないか、そう感じさせられるようなフォーラムとなりました。

今回のフォーラムを契機として、生徒、保護者、教職員、関係いただいた全ての方々とともに、本校の建学の精神である「樹心」について改めて考えることができたご縁に深く感謝いたします。

